

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	外国語学習における回避について : ノルウェー人の日本語学習者を中心に
Author(s)	Solvang, Harry
Citation	ニダバ , 29 : 68 - 77
Issue Date	2000-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048067
Right	
Relation	



外国語学習における回避について

— ノルウェー人の日本語学習者を中心に —

Harry SOLVANG

1. はじめに

言語転移(language transfer)の研究は、目標言語(若しくは第二言語)を習得する際に、学習者の母語(若しくは第一言語)がどのような影響を及ぼすか、という観点に立ち進められてきた。1950年代に盛んに行われていた対照分析研究の基本となる仮説は、学習者の第一言語と第二言語の言語的差異を明確にすることにより、学習上どのような困難点に直面するかを予測できるという考えに基づいていた。学習者の母語パターンが異なる第二言語パターンに転移され、学習の妨げとなり、つまり誤用を引き起こすとみなされていた。このような母語から目標言語への干渉(interference)は「負の転移(negative transfer)」とも呼ばれている。一方、第二言語学習者の母語と目標言語の類似点が習得を促進する「正の転移(positive transfer)」という現象はそれほど注目を集めていなかった。1970年代、対照分析の有効性に対して持たれてきた疑問をきっかけに、誤用分析研究が盛んに行われた。その結果のひとつとして、目標言語が同じで母語を異とする学習者でも同種の誤用を生み出す場合があるという事が示された。そのために、母語干渉の影響はしばらくの間、疑問視されるようになった。さらに研究が進むにつれて言語転移という概念には新しい要素が取り入れられて、その定義が拡張されたので、転移現象が再び研究の焦点となってきた。現在の crosslinguistic influence と称している概念は、そもそも Kellerman & Sharwood Smith (1986)が導入した用語で、第一言語と第二言語の相違点と類似点は相互にどのような働きをして、第二言語を学習する際どのような影響を及ぼすかという広い意味の内容を表わしている。中でも相違点と類似点が引き起こす困難を反映する表現として「回避 (avoidance)」という現象がある。

Ellis (1985,p.299)は回避について次のように述べている:「回避」は、母国語話者の表出と比較すると、学習者の表出では特定の目標言語構造がかなり少ない場合に起こると言われている。学習者は、学習が困難であると思われる言語構造を回避するようである。この困難の原因は、恐らく、目標言語と母国語の構造との違いによるであろう。この点において、「回避」は言語転移の反映であるといえる。」回避(avoidance)は、過小生成(underproduction)と呼ばれる場合もある。

回避という現象については、Schachter (Schachter (1974))がその存在を初めて明らかにしたということによく知られている。Schachter は第二言語としての英語学習者の関係節表出について調

査し、母語からの影響を調べる上で、対照分析の適応性を改めて強調した。Schachterの研究が引き金となって、学習者の第二言語表出に形式的に現れない部分にも転移が認められるようになり、回避現象に注目した研究が次々と続き、回避の概念が発展した(Kleinmann(1977,78), Kellermann (1978,83), Eckman(1977), Gass(1980), Kellermann, Sharwood-Smith (1986), Laufer&Eliasson(1991) 等)。

本論文では、これらの回避に関する理論を、第二言語習得における経時的な実験を通じて検証することを目的とする。主に crosslinguistic influence の範囲を第二言語学習者の母語から目標言語への影響の枠内に設定し、ノルウェー語を母語とする学習者を対象に、第二言語としての日本語を身に付けて行く過程で、実際に何を行い、またなぜそうするかを回避という観点から論じることとする。

具体的な研究対象として、日本語とノルウェー語の間に顕著な相違を持つ条件接続詞とモダリティ成立制約という部分を取り上げる。日本語における従属節に使う条件接続助詞と主節の文末にくるモダリティは大いに制約されている。日本語における4つのそれぞれの条件接続助詞「ト、タラ、バ、ナラ」には異なった文末との呼応制約があり、その規則に反すると、文の適切性が下がるのである(仁田(1989)、田(1989)、前田(1991))。

モダリティの分類については、仁田(1989)と田(1989)の分類を参考にした。筆者は、仁田の「働きかけモダリティ」と「表出モダリティ」というモダリティ分類上の用語と、田(1989)の「働きかけ」と「意欲文」という用語が内容的に一致しているので、併せて「遂行モダリティ」として扱うことにした(Solvang, (1998))。遂行モダリティとは、話し手が聞き手に何らかの行為を要求したり、話し手が自分の行為を拘束するなどの遂行を伴っているということである。一方、遂行を伴わない発話(仁田の「述べ立て」「問いかけ」と田の「描写文」「判断文」)は併せて「述べ立てモダリティ」として扱うことにした。

モダリティ制約を最も受けている日本語条件接続助詞は「ト」と「動作性+バ」(注1)である。これらのどちらかを従属節に用いる場合、命令・依頼・禁止・忠告・意志・希望・決意、などのような遂行(deontic)モダリティを含んでいる主節と接続できない。次のような文

* ①春になると、桜を見に行こう。

* ②東京へ行けば、お土産を買って下さい。

は成立しない。それに対して、遂行を伴わない、すなわち描写・解説・判断のような述べ立て(epistemic)モダリティを含んでいる主節の場合、「ト」と「動作性+バ」の成立制約が解除される。従って、以下のような文は問題なく成立する。

③春になると、桜が咲きます。

④東京へ行けば、友達と会えます。

一方、「タラ」と「ナラ」と「状態性+バ」という条件接続助詞は微妙な場合を除いて、全くモダリティ制約を受けないと言ってもよい(注2)。日本語と異なって、ノルウェー語の条件文には、従属節で条件の意味を持っている従属節詞のどれを用いても、主節の文末表現との呼応制約(モダリティ

制約)は存在しない (Solvang(1998)を参照のこと)。すなわち、ノルウェー語では「モダリティ制約を受けない条件文」という項目が日本語では「モダリティ制約を受けない条件文(タラ、ナラ、状態性+バ)」と「モダリティ制約を受ける条件文(ト、動作性+バ)」という2つの項目に分岐することになる。言い換えれば、両言語に重なる領域もあれば、重ならない領域もあるということである。これらのノルウェー語と日本語の相違点と類似点がノルウェー語を母語とする日本語学習者に学習困難を引き起こすという点については、Solvang(1998)で取り上げた。しかし、調査方法として文法性判断法しか取り入れていなかったため、ノルウェー人の日本語学習者の条件表現に対する困難点はまだ十分に明らかにされていないと思われる。そこで、本稿では、ノルウェー人の日本語学習者は困難であると思われる項目を実際にどのように扱っているかについて、回避という観点から論じる。

2. 研究方法

回避を検証する上で、回避現象と言語習得の困難点を有意に関連付けるため Kleinmann (1977) と Eckman (1977) の指摘した

- まだ学習していない第二言語項目は回避できないので、対象とする言語項目は既に学習したことを確かめなければならない
- 学習者は自信がないため使用しない言語項目に対する困難を表わすしかないような環境を作らなければならない

を前提項目として留意する。従って、研究対象とした条件表現はノルウェーのベルゲン大学での日本語講座1年目の後期の終わり、それからまた2年目の前期の初めの授業で教授した項目であったものを最初に確認した(注3)。次に、学習者に学習上の問題点や困難を出現させやすい手法を考案した。それは、被験者に様々なモダリティを含んでいるノルウェー語の文章を提示し、日本語に訳してもらう方法である。

データの収集は、ベルゲン大学で日本語の授業を受けている10名の学生を対象にして、1年にわたり、2つの特定の時期に、その学生の課題に対する回答を集めた。

3. データ解析の結果と考察

被験者へ日本語訳をさせるために提示したノルウェー語の資料は、遂行モダリティと述ベ立てモダリティの各領域に属する25個の文章である。文章のモダリティ領域別の割合は、遂行モダリティ20個、述ベ立てモダリティ5個である。他の要素をできるだけ解除するため、難解だろうと思われる語彙を抽出し、単語表を被験者のために用意した。さらに、被験者に自分の好みの辞書と漢字辞典を使わせて、被験者の条件表現に対する困難の程度だけが明らかになるよう努めた。

以下、被験者に提示したノルウェー語の文章に日本語訳を付けて、列挙する。参考までに、それぞれの文について日本語訳の例を添えた。

1. Gi meg beskjed **hvis** han kommer. (遂行)
彼が来たら、知らせてください。
2. **Dersom** du ikke liker det, trenger du ikke spise det. (遂行)
好きでないのなら、食べなくてもいいですよ。
3. Jeg vil gjerne gå på konserten sammen med deg **hvis** du kjøper billetter. (遂行)
切符を買ってきてくれるなら、一緒にコンサートについて行きたい。
4. **Om** temperaturen går under null, går regnet over i snø. (述べ立て)
気温が零下になると、雨が雪になる。
5. **Hvis** jeg reiser til Italia til sommeren, vil jeg gjerne se Venezia. (遂行)
夏にイタリアに行ったら、ベニスを訪れたいと思います。

以降省略

被験者の翻訳結果から得られた、各日本語条件表現使用頻度とそれぞれの誤用頻度を「表1」に示す。各被験者はアルファベットの大文字のA~Jで区別する。各文章の適格性・不適格性を判断する際、本稿のセクション1でまとめた「ト、タラ、バ、ナラ」条件文のモダリティ成立制約を参考にした。各条件接続助詞の使用頻度を数字で示し、成立しない領域に適用される場合、その回数を()内に示した。データの収集が行われた二つの時期を「前期」と「後期」で示した。

「表1」日本語翻訳実験

	ト		タラ		動作性+バ		状態性+バ		ナラ	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
A	6 (4)	4 (1)	8 (0)	5 (0)	7 (7)	11 (10)	0 (0)	0 (0)	4 (0)	5 (0)
B	2 (1)	0 (0)	11 (0)	19 (0)	3 (3)	0 (0)	2 (0)	0 (0)	8 (0)	6 (0)
C	10 (8)	5 (4)	14 (0)	9 (0)	1 (1)	5 (4)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	5 (0)
D	0 (0)	4 (2)	18 (0)	11 (0)	0 (0)	1 (1)	1 (0)	1 (0)	6 (0)	8 (0)
E	4 (0)	8 (3)	8 (0)	17 (0)	10 (9)	1 (1)	3 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
F	4 (0)	3 (0)	8 (0)	9 (0)	6 (6)	7 (5)	2 (0)	0 (0)	5 (0)	6 (0)
G	4 (2)	2 (1)	14 (0)	16 (0)	6 (5)	2 (1)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	4 (0)
H	6 (4)	2 (2)	10 (0)	14 (0)	6 (6)	2 (2)	2 (0)	1 (0)	1 (0)	6 (0)
I	7 (5)	2 (0)	10 (0)	15 (0)	4 (4)	2 (2)	2 (0)	1 (0)	2 (0)	5 (0)
J	1 (0)	2 (0)	17 (0)	17 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	6 (0)	6 (0)
合計	44 (24)	32 (13)	118 (0)	132 (0)	43 (41)	31 (26)	13 (0)	5 (0)	32 (0)	51 (0)

これらのデータ解析の結果から、ノルウェー人の日本語学習者の日本語条件表現生成について考察する。このデータから明らかになったのは、ノルウェー語を母語とする日本語学習者には、「ト」と「動作性+バ」で条件表現が成立しないモダリティ領域は相当な学習困難を引き起こすということである。これは、ノルウェー人が述べ立てモダリティと遂行モダリティを通常区別しないため、日本語の条件表現成立可能領域がノルウェー語のその領域より狭いときに、適用する領域をノル

ウェー語の領域まで拡張することを表わしているのではないかと考えられる。

前期の調査に表われた条件接続助詞使用頻度とその誤用頻度から判断すれば、被験者を大きく次のように分けられる：

—「ト、タラ、バ、ナラ」のどれでも使用するが、「ト」と「動作性+バ」の両方を間違えて、遂行モダリティ領域に適用する被験者(A,B,G,H,I)

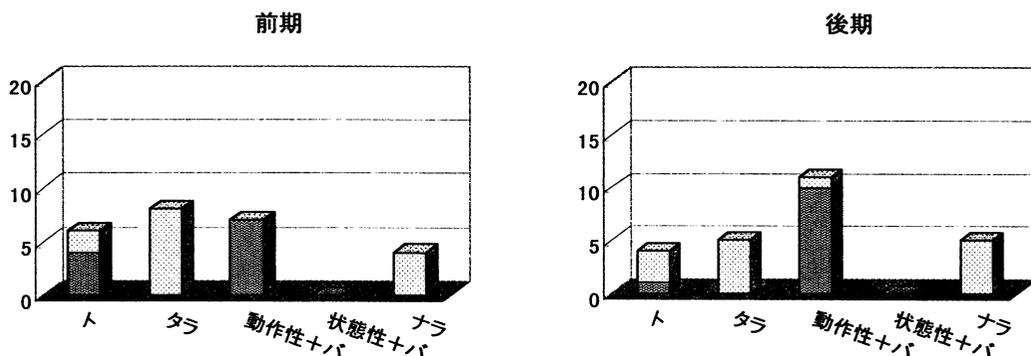
—「ト、タラ、バ、ナラ」のどれでも使用するが、「ト」と「動作性+バ」のどちらかを間違えて、遂行モダリティ領域に適用する被験者(C,E,F)

—「ト」も「動作性+バ」も用いない、「タラ」の多用が見られる被験者(D,J)

被験者は前期の調査で明らかになった日本語条件接続助詞に対する困難を克服するため、時間の経過とともに、どのような個人的なストラテジーや手段を利用するかという点を把握できるよう、後期で行われた調査の結果と照らし合わせる。被験者それぞれの発達過程の特徴が異なっているため、以下個々に述べる（各被験者毎に「表1」をグラフ化したものを付ける。グラフの縦軸は頻度数を表す。柱状グラフの高さは使用頻度を示すが、かげの部分（ハatched部分）は誤用頻度を示す）。

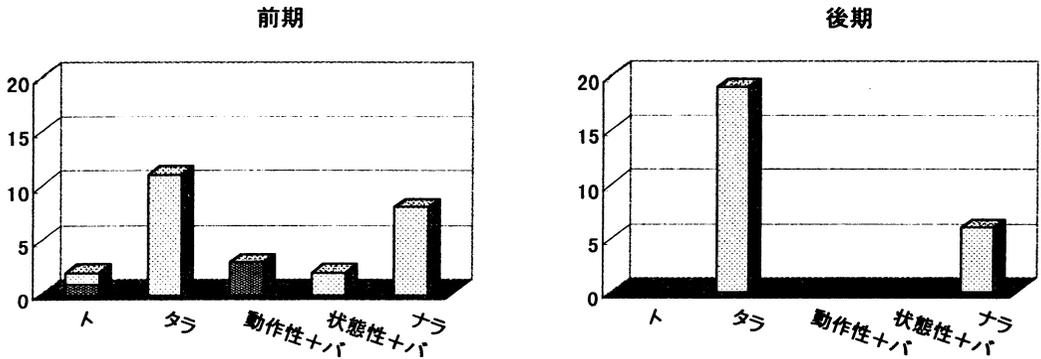
「ト、タラ、バ、ナラ」のどれかを使用しないだけで回避が起きていると判断するわけにはいかないので、前期に誤用していた項目を後期に使用を避けた場合は回避を認めることとする。

3. 1. 1. 被験者 A の場合



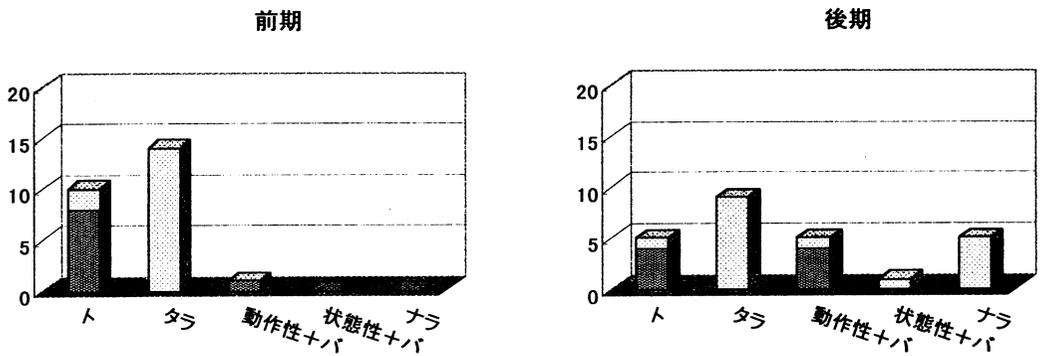
前期では、日本語において4つの条件接続助詞のどれをも積極的に使用するが、モダリティ成立制約を受けている「ト」と「動作性+バ」の使用を成立しない遂行モダリティ領域まで適用したので、「*私はいないと、メッセージを残して下さい」のような不適格な文を生成した。前期と比べると、「ト」の誤用頻度が後期になってかなり減ってきたが、「動作性+バ」の場合、前期で見られる傾向が尾を引くようである。これは、学習期間に沿った「ト」に対する訓練効果があったことを示していると思われるが、「動作性+バ」の使用制約については、被験者 A はまだ迷ってしまうようである。しかし、この誤用は学習上の内的な原因による誤用の可能性でもあると推察される。被験者は「バ」の成立規則のせいで混乱して、「動作性+バ」の成立可能領域を遂行モダリティ領域に設定したとすれば、このような学習上の誤用が起きるだろう。被験者 A の場合、回避という現象が認められなかった。

3. 1. 2. 被験者 B の場合



前期では、「ト」を除いて、他の条件接続助詞を積極的に使用したが、「動作性+バ」を3回成立しない領域に適用した。後期では、「ト」と「バ」が全く出現しなかった。その代わりに、「タラ」の使用量が増えて、頻繁に使用する傾向が見られた。これは、被験者に「ト」と「バ」に対する困難の負担を軽減しようとする心理的なメカニズムが働いて、それらをなるべく使用しないようにしていることを示しているとおもわれる。すなわち、この場合、回避が起きた可能性が高いのではないかと推察される。「タラ」の過剰生成はこの回避の反作用として表われる現象と考えるとよからう。

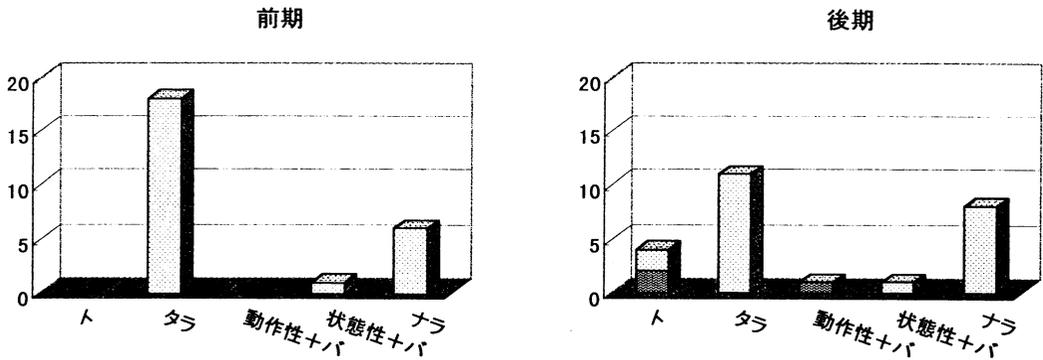
3. 1. 3. 被験者 C の場合



前期では、「バ」と「ナラ」の低い使用頻度が目立った。これは、この条件接続助詞の使用に対する不安を反映するだろう。明らかに困難を起こしているのは「ト」である。「*好きではないと、食べなくてもいい」、「*私は結婚すると、教会でしたい」などのよう、「ト」がモダリティ成立制約を受けている領域にも適用する例が多かった(8回)。

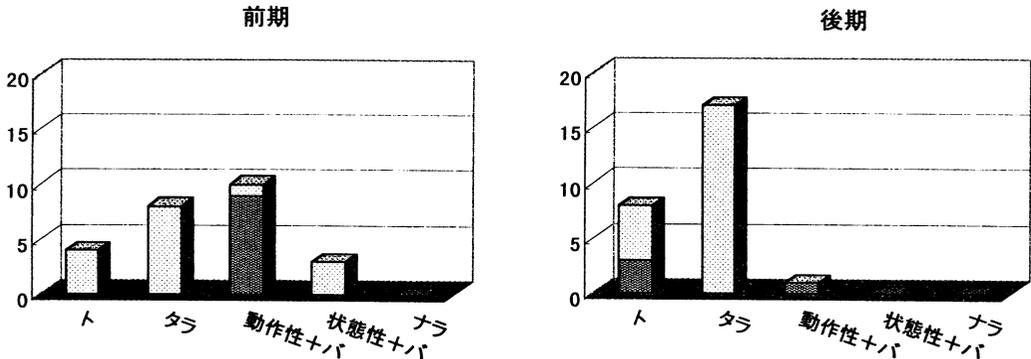
後期の調査結果と比べると、「ト」の誤用頻度が下がってきた(4回)が、使用頻度も同じ割合で下がった。被験者は「ト」に対する困難がまだ克服できていないと言ってもよいが、回避のメカニズムが働いているとまでは言い難いだろう。一方、前期では使用していなかった「バ」と「ナラ」が後期で用いるようになった。しかし、「動作性+バ」の使用制約の知識はまだ欠けているようなので、「*そんなに馬鹿な振る舞いをすれば、そとに出て行け」のような文を作成していた。

3. 1. 4. 被験者 D の場合



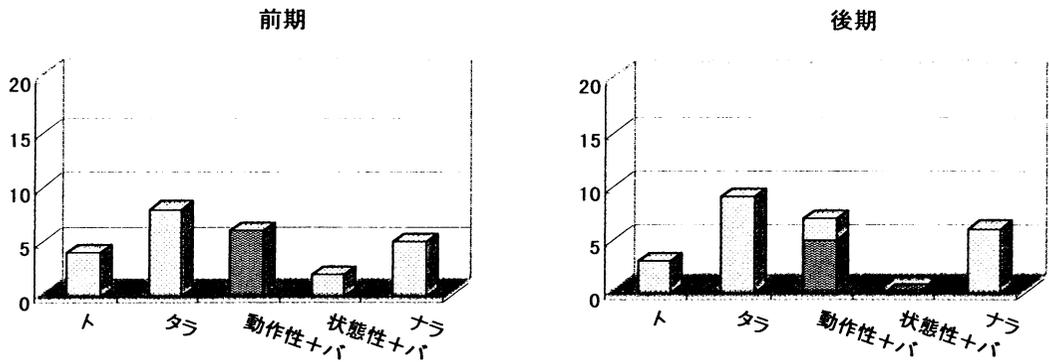
前期の段階から、条件接続助詞を「タラ」と「ナラ」に絞って、「ト」と「バ」を全く使用しない傾向が明確に見られる。同時に、「タラ」の過剰生成は顕著である。この結果から、被験者 D は「ト」と「バ」を回避することを期待しやすいが、後期で「ト」を用いるようになり、「バ」に対する困難ははっきり表われていないので、回避という現象は認めにくいだろう。

3. 1. 5. 被験者 E の場合



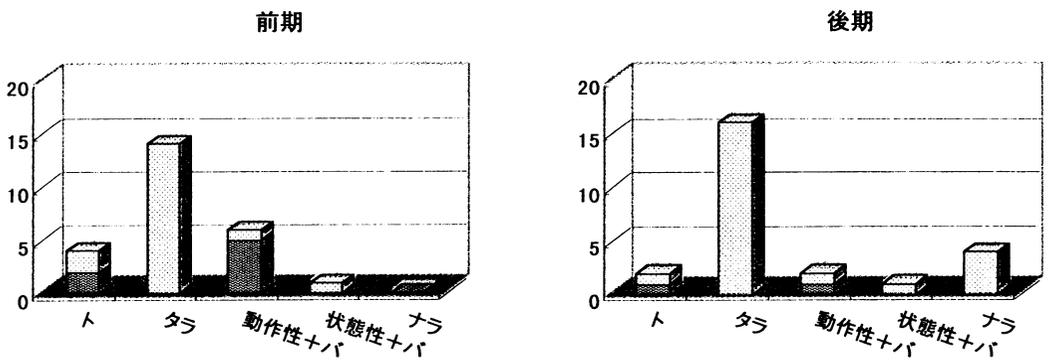
前期において目立つのは、「バ」を主節のモダリティの有無に関わらず適用し、「*くじに当たれば、新しい車を買いたい」、「*ジョンさんに会えば、よろしくを伝えなさい」などのような文を生成するので、高い頻度で誤っていた。さらに、「ナラ」は一回も使用されていない点も明らかである。この被験者が「バ」に対する困難の負担を減らすために考えた戦略は、後期で「バ」の使用を完全にやめたということである。すなわち、ここでは「バ」についての回避が認められた。被験者は「タラ」の使用を倍に増やしたことがこのような推測の裏付けとなるだろう。一方、「ナラ」の不使用が後期でも続いているという結果は、その使用に対する不安を示しているのではないかと推察されるが、回避されているかどうかは決めにくいだろう。

3.1.6. 被験者 F の場合



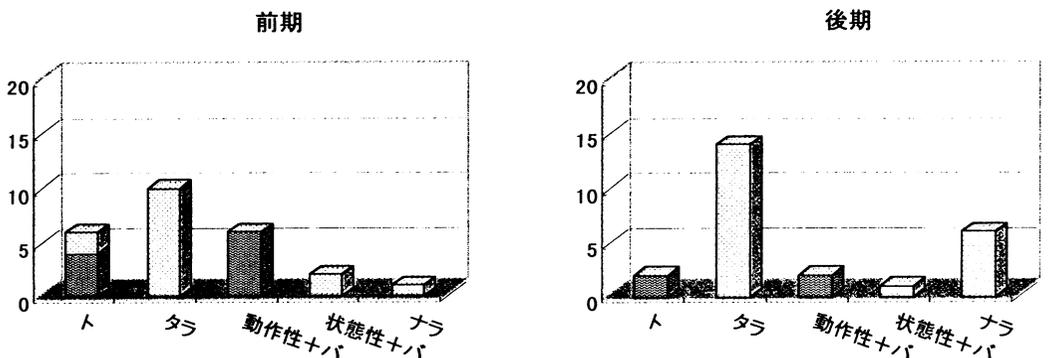
被験者 F は「ト、タラ、バ、ナラ」のどれをも、変わらない頻度で両学期に使用していたが、「バ」の成立制約を身に付けていないので、適用されない領域でも許容される。この被験者の場合、回避という現象は認められなかった。

3.1.7. 被験者 G の場合



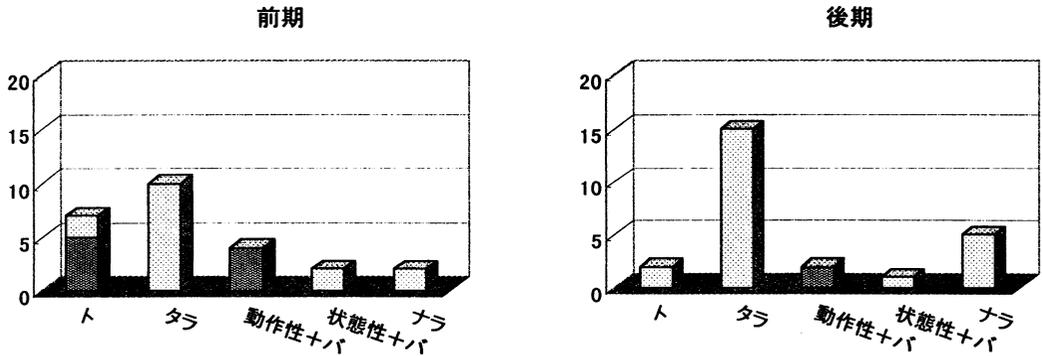
前期の調査で、「ト」と「バ」両者を成立不可能領域に適用している傾向が見られたが、後期に入ると、「ト」も「バ」も比較的過小に生成されたので、これは回避の証拠として許容されるだろう。

3.1.8. 被験者 H の場合



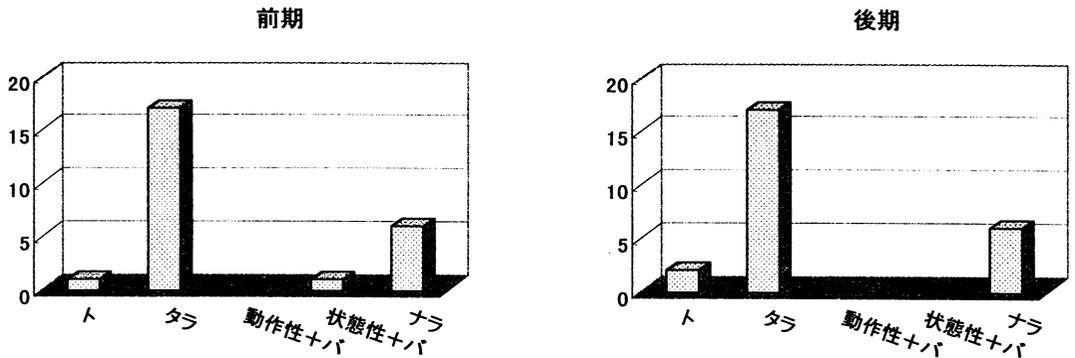
この被験者の調査結果は上述の被験者 G とほとんど同様であった。そこで、この場合も、「ト」と「バ」の困難を克服する対策として、回避という現象が認められたということになる。

3.1.9. 被験者 I の場合



前期で、「ト」と「バ」を成立しない遂行モダリティ領域まで適用されたので、不適格な文を生成する傾向が推定される。この「ト」と「バ」に対する不安を押さえるため、被験者は後期で両者を控えめに使うような手段を利用したのではないだろうか。「ト」と「バ」それぞれの使用頻度が後期で下がってきていると同時に、「タラ」の使用頻度が上がってきたことは、被験者は困難と思われる項目の使用を「タラ」の領域に移動させたことを示しているのではないかと推察される。従って、「ト」も「バ」も回避されたと考えてよかろう。

3.1.10. 被験者 J の場合



前期から後期にわたって、「バ」を全く使用しなかったことはこの被験者の特徴である。「ト」の過生成も同じく顕著である。また、「タラ」は非常に積極的に使われていることも目立っていた。この使用頻度の割合は被験者の「バ」と「ト」に対する困難を隠す対策、つまり回避の存在が考えられるが、一方その困難は表面化されていないので、その存在を裏付けることができない。

4. 結論

本稿では、ノルウェー人の日本語学習者が日本語で条件表現をする際、困難を引き起こすと

思われる条件接続助詞におけるモダリティ成立制約をどう扱っているかを回避という観点から論じてみた。その結果明らかになった点をまとめると、以下のようになる。

- ①日本語とノルウェー語において、条件接続詞の成立領域の差異がノルウェー人の日本語学習者の条件表現生成に関与している。
- ②日本語の条件接続助詞の使用に対する困難には個人差が認められる。
- ③その困難を克服する対策として、様々なストラテジが認められ、その一つに回避という現象が認められる。
- ④ある条件接続助詞の回避の反作用として、他の接続助詞の過剰生成が認められる。
- ⑤回避が起きやすい状況として、日本語とノルウェー語の間に相違点がある場合が上げられる。
- ⑥被験者の中で、回避の強い傾向を示している被験者は B(ト、バ), E(バ), G(ト、バ), H(ト、バ), I(ト、バ)である。

注

- 1) 従属節の述語が動作性または状態性を現わす場合によっては、主節に「バ」で接続できるモダリティ制約が異なるので、前者を「動作性+バ」、後者を「状態性+バ」として区別することにする。
- 2) 井上(1983)、稲葉(1990)、Solvang(1998)が「ト、タラ、動作性+バ、状態性+バ、ナラ」それぞれのモダリティ成立制約仮説の妥当性を日本人の使用実態調査により明らかにした。
- 3) 被験者としては、ノルウェーのベルゲン大学で日本語を初級レベルから受講しているノルウェー人を対象とした。日本語講座は2年間、2学期制の講座であり、授業は週に10時間(1時間は45分)、1学期は12週、通算120時間を学習する。なお、データの収集は講座の2年目の前期の初めと後期の終わりの2回、つまり被験者の学習時間がおおよそ275時間と450時間という時点で行われた。

参考文献

- Eckman, F. (1977) Markedness and the contrastive analysis hypothesis, *Language learning*, 27
- Ellis, R. (1985) Understanding second language acquisition, Oxford University Press
- Kellermann, E. & Sharwood-Smith, M. (1986) Crosslinguistic Influence in Second Language Acquisition, Pergamon
- Kleinmann, E. (1977) Avoidance behaviour in adult second language acquisition, *Language learning*, 27
- Schachter, J. (1974) An error in error analysis, *Language learning*, 24
- Solvang, H. (1998) 「ノルウェー語から見た日本語の条件表現」 広島大学大学院文学研究科言語学専攻、修士論文
- 稲葉みどり(1990) 「順接・仮定条件文成立のためのモダリティ制約—日本人調査を通じて—」 「ことばの学科」3
- 井上和子編(1983) 「日本語の基本構造」三省堂
- 田仁淑(1989) 「条件文を伴う複文」 「東京外国語大学日本語科年報」11
- 仁田義雄(1989) 「日本語のモダリティ」 くろしお出版
- 仁田義雄(1987) 「条件接続詞づくとその周辺」 「日本語学」6-9
- 前田直子(1991a) 「論理文の体系性—条件文・理由文・逆条件文をめぐる—」 「日本学報」10
- 前田直子(1991b) 「条件文分類—参考—」 「東京外国語大学日本語学科年報」13